

図書館だより

都城工業
高等専門学校
図書館

No.70

FEBRUARY 2012



「韓国 カンヌン オジユクコン 江陵の烏竹軒」

特集

校内読書感想文コンクール入賞者発表

都城工業高等専門学校

Miyakonojo National College of Technology

「先送りの記」

図書館長 望月高明 …………… 1

特集

校内読書感想文コンクール入賞者発表

校内読書感想文コンクール入賞作品…………… 3

JDream II 研修会開催…………… 14

講師 JST（独立行政法人科学技術機構）

イノベーション推進本部情報提供部福岡デスク のぎ田 めぐみ氏

今年度の活動と図書委員会の在り方について

学生図書委員長 機械工学科 浅野大樹

副委員長 物質工学科 寺田拓真…………… 15

ブックハンティング実施される…………… 15

〈ブックハンティング〉で購入した図書

図書館からのお知らせ…………… 16

統合図書館システムへの移行について

図書館開館予定

学年末・春季休業期間中の長期貸出について

編集後記



●表紙「韓国 江陵の烏竹軒」

韓国・江原道・江陵市にある、李珣(号は栗谷)の生家である。李栗谷は李氏朝鮮中期の著名な政治家・朱子学者。安東出身の李退溪とともに、朝鮮儒学の双璧と並び称されている。

烏竹軒という名前は、庭に鳥のような黒い竹が多いことに由来し、古い住宅建築物として宝物に指定されている。

韓国の5000ウォン紙幣に描かれているのが、まさにこの烏竹軒と李栗谷の肖像である。

また、李栗谷の母・申師任堂は高名な書画家であるとともに、韓国の良妻賢母の象徴としても広く知られている。

撮影 図書館長(一般科目) 望月 高明

先送りの記

図書館長 望月高明

例年、1月と8月はわが国でも人口の大移動が起こる。すなわち正月と盆の帰省のためのラッシュである。私もまた8月は帰省のために必ず上京するが、その時は神田神保町の古本屋街に立ち寄るのを常としている。神保町には100軒以上の古本屋が軒を連ねており、いかにも学生の街という雰囲気醸し出している。学生時代に神保町に足繁く通っていたこと、また一時、神保町が通学路になっていたこともあって、そこに立つとその頃のことを思い出されて非常に懐かしい。

私は宋明時代の儒学思想(朱子学・陽明学)を研究しているが、思えばそれに関連する学術書は学生の私にとっては必ずしも安価なものではなかった。それでも親に無心して無理を押し購入したものだった。それが現在ではずい分安価になっている。(思えば私が学生の頃は『福澤諭吉全集』(全22冊)にしても、『内村鑑三全集』(全40冊)にしてもずい分高価で、学生の私にとっては文字通り高嶺の花であった。しかし、現在では驚くほど安価になったこともあって、両全集とも架蔵するに至っている。)

古本屋に並んでいる書物が安価になったのはよい。殊にその書物の内容、あるいは学問的な水準が既に時代遅れのものとなって、急速にその学問的な価値が失われてしまったというならば、それも致し方ないことかも知れない。しかし、私の見るところ、必ずしもそうとはいい難い。その書物の学問的な価値は依然として現在も失われてはいないのである。それにもかかわらず、驚くほど安価なのである。そのため、中には既に一本を所有しているのに、同じ書物を再び購入するなどという愚行を犯したりする。私は書物の値段がどのようにして決まるのか詳らかにしないが、それが需要と供給の関係において決定されるのは疑いあるまい。そして、かかる背景に総じて、書物と真面目に対峙しようとする者(殊に若者たち)が少なくなったという滔々たる現実の進行が存していただければ幸いである。私はすぐ上で事もなげに福澤諭吉と内村鑑三の名前をあげたが、実は彼等を本当に理解するには、恐らくその人の一生を必要とするであろう。

私には苦い経験がある。その経験をこうして語ることは、自分の無知、あるいは知的怠慢を曝すことであり、決して愉快なことではない。しかし、自分の恥ず

べきことを告白することで、それが本校の若い学生にとって他山の石ともなればと思ひ、敢えて開陳に及ぶ次第である。

行論上、初めに著者とその書名をあげるとしよう。尾藤正英氏著『日本封建思想史研究』(1961年刊)。同書が日本思想史の領域、わけても江戸時代の儒学研究に一つの画期をもたらしたことは周知の通り。上の書物の存在は私が大学院生の頃には既に知っていて、事実一本を所有していた。そして、その一部はその当時確かに読んでいるのである。しかし、江戸時代の儒学思想についての全般的な知識を欠いていたこともあって、けっきょく途中で読むのを止めてしまった。今になって思えば、江戸時代の儒学思想に関する知識を欠いていたというよりは、この書の全体を貫いている問題意識、あるいはそれと緊密な関係にある著者の強靱な思索力…等々に付いていくことができなかつたのが、途中で放り出してしまった真の理由である。そして、その本もその後、引越しやらで紛れてしまい、今では書齋のどこにあるのかも定かではない。数年前、古本屋の店頭で同書を見出し、直ちに購入。一念発起して通読してみた。一読後、しばらくして改めてもう一度読み直してみた。その時に思ったのは、「しまった。何故もっと若い頃にこういう書物と真剣に対峙しておかなかつたのだろう」という、苦い悔恨であった。せめて20代・30代という今より若い頃にこういう書物と真剣に対峙して、テキスト化することができたならば、あるいは自分の学問の性格も現在とはずい分違ったものになっていたかも知れないという、鋭い痛覚の念であった。因みに「覆水盆に返らず」「後の祭り」…等々というが、これらの成句はこういう経験に名付けるために用意されたものなのであろう。もっとも、「蟹は甲羅に似せて穴を掘る」の譬えのごとく、私のような者が仮に若い頃にその書物を読んだからといって、実際には何程のことがあるとは思えない。とはいえ、その時に鋭い痛覚を伴ってそのように感じたことにうそ偽りはない。

私のこの例は、“そのうち機会を見つけて読もう”、“もう少し周辺の知識を身に付けてから読んでも遅くはないだろう”、……等々と、その都度自分に都合のよい言い訳をして、問題を先送りして、けっきょく時

機を失ってしまった悪しき見本である。(これ小文が「先送りの記」という、何とも情けない標題を取った所以である。)しかし、それに止どまらない。私にとって上来のケースはいわば「氷山の一角」にすぎないのであって、実際には私がそうとは自覚していないだけで、これまでにどれだけの名著を読まないで先送りしてきたことであろうか。

そして、私は私なりの代償を払うことによって、次の教訓を導き出した。私が若き学生たちに是非とも伝えなければと思うのは、このことに他ならない。すなわち、その人が20代であれば、20代の中に対峙しておかなければならない書物がある。30代であれば、30代の時に対峙しておかなければならない書物がある。同様に50代であれば、50代の時に対峙しておかなければならない書物がある。そして私たちの周囲にどれほどの名著が存在していようと、その書物と真面目に対峙しない限り、けっきょく私達は文字通り「縁なき衆生」(然り、縁なき衆生である!)にすぎないのだ。多くの名著にとって、私達は単に路傍の人にすぎないのである。同じことだが、それらの名著の数々から我々は永久に見離されたのだといってもよい。それは無尽蔵の大宝蔵が厳然としてそこに存在しているにもかかわらず、あたふたと小利を求めて右往左往している愚行にも警えられるであろう。

昨年の夏、私は些か無理をして2種類の書物を首都圏のある古本屋から購入した。私が所有している書物の多くは洋装本だが、両者はともに和装本。しかも活字本でもなく、木板本でもない。写本である。写本という以上、それが手書きであることは言うまでもない。書名は一本は『近思録講義』(全7冊)、他の一本は『孟子講義』(全14冊)。(『近思録』(14卷)は宋の朱子及びその講友呂祖謙の撰。同書は朱子学の組織とその精神とを理解するための恰好の入門書である。また『孟子』(14卷)が四書の一つとして、心・性・命…等の朱子学の形而上学的概念を構成する上で大きな地歩を占めていることは、周知の通り)。両者はともに江戸時代の朱子学者山崎闇斎を領袖とする崎門学派の高弟の講義書である。因みに崎門学派の思想の解明に、門弟による講義筆記・雑話・学談といったオーラルな形の資料が大きな地歩を占めていることは、既に常識に属する。私の所有に帰した『孟子講義』によると、同書は明治14年季夏に梅野儀一なる人物によって写録せられた。(『近思録講義』も同氏の所蔵に係るが、別の人物の蔵書印もあって、誰の写録かは判然としない。)なお、私は寡聞にして梅野儀一なる人物がいかなる履歴を有す

るのか、詳らかにしないが、恐らく彼もまた明治以降の崎門学派の系譜に連なる人であろう。(楠本碩水の『崎門学脈系譜』は、山崎闇斎及びその三傑、佐藤直方・浅見綱斎・三宅尚斎から、明治・大正に至る崎門学派の学統を闡明ならしめた書であるが、その中にも彼の名前を見出すことはできない)。

三木清(彼が西田幾多郎の高弟であることは周知の通り。また、彼が若き日にどれほど膨大な書物に目を曝していたかは夙に有名)が読書について述べたエッセイの中で、“一冊の本の読者を自分は恐れる”という意味のことを言っていたと記憶する。その意味は、ある特定の書物を自分の生涯の課題として、絶えずその書物に自分自身の思索の源を見出だしていくというような読み方をいうのであろう。私は『近思録講義』でも、また『孟子講義』でも、この写本に記された1文字1文字の筆跡を追っていると、ある名状し難い感覚に襲われてくる。崎門学派の学者が、朱子の人格、あるいはその学問についてほとんどファナティックともいべき畏敬の念を持って、朱子の書を読み来たり読み去ったのは、紛れもない事実である。そして、このような態度には功罪相半ばするものがあるといえ、なるほどそれはそうかも知れない。しかし、梅野本『近思録講義』『孟子講義』を繕く者は、三木清が指摘した“一冊の本の読者を自分は恐れる”といったような、断固とした姿勢を否応なしに感ぜざるを得ないであろう。それは一言以てこれを覆えば、己の生涯を賭けて朱子学を信奉し、その思想に殉じる底の覚悟をもって、その書を愚直に読み来たり読み去ってきたことの具体的形象化ということに他ならぬ。それが梅野儀一なる、現在ではもはやその名前すら忘れられてしまった明治の一崎門学派の学者(?)において、リアルに読み取れるのである。現代のようにすべての価値が動揺して、何一つとして信を置くに足るもののない価値相対化の時代に生きるわれわれの読書とは、極めて対蹠的な読書態度がそこにはある。



校内読書感想文コンクール入賞者（入選）

『沈黙の春』を読んで……………	機械工学科	第1学年	坂元 翔
『雪国』を読んで……………	電気情報工学科	第1学年	大庭 勇河
『もの食う人びと』を読んで……………	物質工学科	第1学年	山中 朋
『変身』カフカ……………	建築学科	第1学年	野田 瑞貴
『人間失格』太宰治……………	機械工学科	第2学年	今吉 敬耶
『ひよこの眼』(山田詠美)を読んで……………	電気情報工学科	第2学年	原田 健太
『ころも』を読んで……………	物質工学科	第2学年	河野日海子
『小さき者へ』を読んで……………	建築学科	第2学年	梅木 春菜
夏目漱石の小説を読んで……………	機械工学科	第3学年	金丸 拓樹
『檸檬』を読んで……………	電気情報工学科	第3学年	押川 侑樹
「さいはひ」を求めて……………	物質工学科	第3学年	田中 勇希
『ころも』を読んで……………	建築学科	第3学年	吉村 茉奈

校内読書感想文コンクール入賞作品

『沈黙の春』 を読んで

1年 機械工学科 坂元 翔

我々人類は、この地球に生まれ、その自然の恩恵を受けて、その自然に生かされてきたのである。だが、人類は発展したと共に自然を破壊してしまっていた。最近では、二酸化炭素やフロンガスといったような温室効果ガスによる地球温暖化やオゾン層破壊、硫黄酸化物や窒素酸化物が溶け込んで降る酸性雨などの環境問題が重大な課題となっている。そんな壊れていく自然の状況を訴えているのが『沈黙の春』である。この本の著者であるレイチェル・カーソンは、海洋生物学者としての洞察力と野生生物とその保護に関する情報収集によって得た広い知識を兼ね備えていた。その本、『沈黙の春』は化学薬品による自然破壊の警告を発した先駆書として、その後の世界に大きな影響を与えた二十世紀のベストセラーである。

この地上に生命が誕生して以来、生命と環境という二つのものが、互いに力を及ぼしあいながら、生命の歴史を織りなしてきた。といっても、環境のほうがたいてい、植物、動物の形態や習性をつくりあげてきた。生物が環境を変えるという逆の力は、ごく小さなものにすぎないのだが、二十世紀というわずかのあいだに、人間という一族が、おそろべき力を手に入れて、自然を変えようとしてしまっている。ただ自然の秩序をかきみだすのではなく、いままでとは、また質の違う暴力で自然が破壊されていく。たとえば、自然の汚染。空気、大地、河川、海洋、すべておそろしい、死そのものにつながる毒によごされている。そして、もう二度ときれいにならないであろう。食物、ねぐら、生活環境などの外の世界がよごれているばかりではない。

禍のもと、すでに生物の細胞組織そのものへとひそんでいく。もはやもとへもどせない。汚染といえば放射能を考えるが、化学薬品は放射能に勝るとも劣らぬ禍をもたらす、万象、命の核そのものを変えようとしている。核実験で空中にまいあがったストロンチウム九十は、やがて雨やほこりにまじって降下して土壌に入りこみ、草や穀物に付着し、そのうち人体の骨に入りこんで、その人間が死ぬまでついてまわる。だが、化学薬品もそれに劣らぬ禍をもたらすのである。殺虫剤などといった畑、森林、庭園にまきちらされた化学薬品は、放射能と同じようにいつまでも消え去らず、やがて生物の体内に入って、中毒と死の連鎖を引き起こしていく。また、不思議なことに、土壌深くしみこんだ化学薬品は地下水によって遠くへ運ばれていき、やがて地表に姿をあらわすと、空気と日光の作用を受け、新しく姿を変えて植物を減らし、家畜を病気にし、きれいな水と思って使っている人間の体を知らぬまにむしばんでいく。アルベルト・シュヴァイツァーは言う、「人間自身がつくり出した悪魔が、いつか手におえない別のものに姿を変えてしまった。」

何年とかいう短い時間ではなく何千年という時をかけて、発展、進化、分化の長い段階を通過して、ようやく生命は環境に適合し、そこに生命と環境の均衡ができてきた。それなのに、自然とは縁もゆかりもない、自分のことしか考えないで、がむしゃらに先をいそぐ人間のせいで、生命と環境のバランスが崩れ始めてきている。人間はかしこすぎるあまりに、かえってみずから禍をまねいてしまう。自然を相手にするときには、自然をねじふせて自分の言いなりにしようとする。そんな人間達がこのような状況をまねいたのだ。化学というのはおそろしいものであると私は思った。

核戦争が起これば、人類は破滅の憂き目にあうだろう。だが、いますでに私たちのまわりは、信じられないくらいおそろしい物質で汚染している。化学薬品やスプレーもまた、核兵器とならぶ現代の重大な問題と言わなければならない。

だから、暴力をふるうのではなく、自然の力をうまく利用することが、自然を相手にすることにおいて大事なことなんだと私は考えさせられた。

『雪国』を読んで

1年 電気情報工学科 大庭勇河

音、音、音。この小説を読んでいる間、私の頭の中は常に音で一杯でした。それは、どの頁にも、音を連想させる言葉が鑲められていたからです。

例えば「雪の鳴るような静けさ」「悲しいほど美しい声」といった表現です。どちらも度肝を抜かれるような派手さはありませんが、両者勝るとも劣らない、素晴らしい比喩だと思いました。なぜなら、比喩というのはいかに情景を分かり易く伝えるか。これが重要だと思うからです。その点において、この二つの比喩は、卓越した限りない表現力を持っていました。

どのくらい静かなのか？ 降っている雪の音が聞こえてきそうなほど、静かである。

どのくらい美しい声なのか？ 聞いているこちらが悲しくなってしまうほど、美しい声である。

こういった細かい情景が容易に想像できるほど、この二つの比喩はとても優れていました。

また、この二つの他にも、私を魅了して止まない表現があります。それは「単調な車輪の響きが、女の言葉に聞こえはじめて来た」というものです。全く関連

性の無い、車輪の音と女性の声。けれど、この二つの言葉は、何の違和感も無くお互いを引き立て合っています。私は初め、この表現の意味が分かりませんでした。なぜ車輪の音が女性の声に聞こえるのだろう。いくら何でも、これは無理なこじつけだな、そう思っていました。しかし、この小説を読み終えた次の日。ああ、なるほど、と納得しました。確かにそう聞こえるぞ、と。それは、通学の時でした。私は通学に電車を使っていますが、その時の電車のブレーキ音。これが、人の金切り声のような、叫び声のような、そんな風に聞こえたのです。かなり耳を澄まさなければ、そんな風には聞こえなかったと思います。こういった、日頃何気なく聞き逃しているたくさんの音。この本の著者川端康成は、その音ひとつひとつに耳を傾け、この『雪国』を書きあげたのだと思います。著者の豊かな感性と耳の鋭さ。ここから生み出される、この小説独特の、音の世界。これが、長年に渡って多くの人に愛され続ける、この作品の最大の魅力だと感じました。

『もの食う人びと』を読んで

1年 物質工学科 山中 朋

「悲劇から悲劇へと渡り歩いた果てに、いま平然と生きてあるという自責に似たなにかの感情が抜けない。」

私は、筆者が感じたなにかを知りたくなりました。筆者、辺見庸さんが旅に出た理由は、怒りの味、憎しみの味、悲しみの味を思い出すためと書いてありました。裕福な現代の日本では忘れられた味かもしれませぬ。

まず、辺見庸さんが訪れた国は、バングラデシュ。そこで体験したのは、「残飯」でした。ダッカには金持ちが残した食事の市場があるそうです。私は、残飯を食べるのは家畜だけだと思っていたので正直ショックでした。無駄がなく合理的と考える人もいるかもしれません。

「禽獣は食らい、人間は食べる。教養ある人にしてはじめて食べ方を知る。」人もまた、しばしば禽獣並みに「食らう。」「教養ある人」富める人は、おそらく優雅に食らっているだけなのだ。という、辺見庸さんの言葉に共感するものがありました。たしかに本来食というものは命をつなぐためだけのもの。それが、富める人や教養のある人が「楽しむ食」に発展させ、現代の食の姿になったのです。それがはたしていいのか悪いのか私には判断できませんが、食文化の奥深さを知りました。

「ミンダナオ島の食の悲劇」は、残留日本兵が人間を食べたお話でした。トラック運転手が「行く先は皆連中の鍋の中だったよ」と冗談でなく言ったと書いてありました。私は、冗談だと思いました。しかし読み進めると、「戦争とそれに伴う極限状況が人類最大のタブーを破らせた。」と書いてあり、私は納得しました。その話は山の中の話ですが、山には動物や里芋もあったそうです。やはり戦争は人を変え、食にも影響してくるのだなと思いました。

「黒を食う」は、炭鉱員の話でした。炭鉱員は、炭化物質をシャベルですくいベルトコンベヤーに載せる作業をします。そのため口には炭がたくさん入るそうです。また喉がかわく、そんな時に辺見庸さんが口にしたのは、「ボグラッチ」でした。辺見庸さんは、炭で真っ黒だった舌に、牛骨と香味野菜の味が心地よく染みたと書いていました。また、「死ぬほどうまい！」と感じたそうです。私もいつかそんな食べ物に巡り会いたい

なと思いました。しかし、その味は苦勞しないと食べられないだろうと感じました。

「禁断の森」は、今の日本でも問題になっている話題でした。それは、チェルノブイリ原発事故の話でした。森のキノコやリンゴ、魚は食べないほうがよいのに食べている現実。私は、放射能に対し鈍感になっている人々に恐れを感じました。福島原発の周りにもこのようなことがおこらないか心配です。

「人魚を食う」は、ジュゴンを食べるという話です。今は、絶滅寸前で食べると罰金が課されるそうです。ジュゴンを食べる人々は、日本も鯨を食うんだよと言いました。鯨を食べる日本人と同じような気持ちなのかと思いました。

「ピナトゥポの失われた味」は、山中で暮らしていたフィリピン先住民が下界の味を覚えはじめてしまった話です。先住民は、下界の味を覚えてしまったばかりに苦しんでいるという話でした。山の味と下界の味との葛藤、とてもつらいだろうなと思いました。山に行けば下界の味が恋しくなり、下界に行けば山の味が恋しくなる。どちらの味もいいですが、なぜかかわいそうだなと思いました。

この本を読んで、世界の人々のこと、またその人達に関わる食を知りました。食とは、奥が深いものだなと思いました。私はこの本を読み、食とはなにかを考えました。しかし答えはでていません。一生つきあわなければならない食のことを、これからも考えていきたいと思います。



『変身』 カフカ

1年 建築学科 野田 瑞貴

虫の気持ちがよく分かる物語。カフカの『変身』を一言で言えばそんな感じである。いつも、虫を大量に殺し、いじめている私に虫の気持ちを教えてくれた大切な物語である。

変身に出てくる主人公がゴキブリみたいな虫に変わった時、最後は人間に戻ってハッピーエンドなんだろうなと思った。しかし、人間には戻らず餓死した。いままで読んだ本の中で一番残酷な終わり方だと思った。もし自分がこの本の主人公みたいにゴキブリのような虫になってしまったら、したいことがある。

それは、人間をからかってみることである。虫はすぐ薬や人間に新聞などでたたかれて死んでしまう。しかし、私が虫になったら、瞬足で逃げ、薬に負けない体を持ち、いくら足が速い人でも殺せない虫になりたい。そして、仲間たちをこらしめた人間どもに復しゅうをしたい。虫仲間全員に呼びかけ、家の中を虫のフンだらけにするのだ。私は、虫になったら楽しそうなことばかりを考えていたが、虫の本当の気持ちを知ったらもう楽しいことは考えられなくなった。

この本の主人公には妹がいた。主人公は妹のことを「りこう者だ」と言っている。しかし、この妹は最後のほうでこんなことを言っていた。「こいつはおとうさんとおかあさんとを殺してしまうわ。そうなることが私には分かっています」と言っている。そこで私は、自分の姉が巨大な虫になってしまったらと想像してみた。いろいろと考えたが、私も最終的にはこの妹と同

じことをしてしまうという結果にいたった。想像してみてください。自分の家に巨大なゴキブリみたいなのがいることを。そして、そいつは攻撃たいせいをとっている。最初は、あわれだとかかわいそうだと思って接していると思うが、やはりたえきれないと思う。しかし、私とこの主人公の妹と違うことをするなと思ったところがある。それは、今は虫の姿をしているが、元は自分の兄であり人間だった虫に変な食事は与えないことだ。虫が全くごはんを食べていないのなら、これは食べられないのだかと思って研究してから私は虫に食事を与えると思う。しかし、この妹は半分腐った野菜や夕食の食べ残りの骨、まずくて食べられないチーズとかを与えていた。今までずっと家計を支えてきた人間だった虫にすることではないと思った。それともう一つ妹と違うことをするのがある。それは、虫を餓死させないことだ。せめて、虫の好きな食事を与え、家をはなれることになったのなら、それなりの量を虫の食事を家に置いとけばいいと思った。そしたら、この虫は時間がたつとまた人間に戻れたのかもしれない。

この本を読んで、本当に本当に害のない虫、人間の役に立ってくれる虫は殺さないと決めた。もし私が、虫を殺していたりしたら、この本をもう一度最初から読みなおし、虫の気持ちをもう一度知ってから虫と向き合いたいと思う。まわりで虫を大量に殺している人を見つけたら、この本をすすめたいと思う。

『人間失格』 太宰治

2年 機械工学科 今吉 敬耶

僕がこの『人間失格』を読んで、最終的に考えたことは、この主人公である「大庭葉蔵」が自分とはどういふものなのか分からなかったり、本当の自分を隠してお道化としてみんなを笑わせたりということはどうな人でも少しは感じたことがあったり、やったことがあるはずだということです。

後半の方では葉蔵は酒を止められなくなったり、薬を止められなくなったりして完全に悪い方に向かってしまっていました。もし、葉蔵が学生時代のようにた

だ本当の自分を隠してお道化を演じているだけだったらその先の人生も酒や女におぼれたり、薬に依存したりはしなかったと思います。

こんな普通にいそうな小学生がなぜ人間失格といわれるような大人になってしまったのかは、竹一という友達や堀木などの人達に対して、本当の自分を見破られたり、本当の自分をたまに見せてしまったりしながら、それでも本当の自分を隠そうとがんばりすぎて、本当の自分とは何かを考えすぎて、こうなってしまっ

たのだと思います。

まず友達の「竹一」が始まりで、竹一が葉蔵の行動をワザとだと言ったことに対して、葉蔵が竹一をどうにかして、このワザとだということをみんなに隠さないといけないと頑張っていて、この時から葉蔵は自分のことを隠すことに必死になりました。その後、竹一とは家で遊んだり、「画家になれ。」と言われてたりして、葉蔵は絵を描くことを楽しいと思うようになっていた。葉蔵にとって絵を描くことで少しずつでも本当の自分を表に出せていたのだと思う。竹一に「画家になれる」と言われて美術学校に入りたいと思ったが入れなかった葉蔵は、普通の高校に入った時点で、もう普通にいそうな学生ではなくなってしまったんだと思う。

更にこの頃から親が近くにいない状態になり、学校にも行かず、美術教室には通っていた。そしてそこで、「堀木正雄」という男に会って飲みに行ったりして、酒やたばこや、女などを知って堀木が行くところについていく感じでどんどん止められなくなっていってしまっていた。この時からどんどん悪い人間の方へ向かっていっていたのだと思う。

また、葉蔵自身は、ツネ子という人を好きになっていたが、葉蔵もツネ子も同じような悲しみがあって死

のうとして葉蔵だけが助かった。葉蔵はこの時、本当に一人になってしまったんだと思う。

結局この後も葉蔵は堀木のところへ行き、また酒を飲みはじめ、元の悪い生活に戻ってしまい、自分のやりたいことも見つからずにただ道化でだますことで酒を飲んでた。そして何度も同じ様なことを繰り返しているうちに、葉蔵は「ヨシちゃん」という人によって、ヨシちゃんの信頼のおかげで酒をやめられて、漫画もまた描き始めていい生活をしている様だったが、ヨシちゃんの違う場面を見てしまい、葉蔵もヨシちゃんもだめになっていった。この頃葉蔵が見つけた薬は、ヨシちゃんが自殺しようとして隠しておいた薬だと思ふ。その薬を自分で飲んだ葉蔵は、ヨシちゃんに同情してのことだったので、すごい覚悟だと思ふのと同時にすごく追い込まれていたんだと思う。

それでも助かった葉蔵は酒だけでなく、今度は酒を止めるため薬の方に依存してしまい、最終的に脳病院に入った。結局、葉蔵が考えた自分とは、「狂人で癡人で人間として失格だ」ということだったんだと思ふます。

どんな人生でも葉蔵が言うように、「ただ、一さいは過ぎていく」ので、どんなことにも精一杯とりくんでいきたいと思う。

『ひよこの眼』 (山田詠美) を読んで

2年 電気情報工学科 原田健太

普段の私達は「死」という概念がどこかにあるのではなく、とても身近に存在することをあまり意識しない。それは高度に完成された社会が、普段の私達から「死」そのものを隠蔽しているからだと思っている。それは悪いことではない。いつかは誰でも平等に訪れる死という現象、死ぬことで自分の人生が終わってしまうことを誰もが望んでいないからこそ、現在のような生活が生れたのだと思う。しかし、それは上辺だけの話だ。自分が死ぬときの恐怖から逃れられる人はいないだろうし、「死」に携わる仕事をしている人にとって、「死」はそれこそ日常の一部かもしれない。そう考えると、今の私達の世界で生きることと死ぬことは、あまりにも当たり前前で意識するまでもないのだと思われる。

今回、私が読んだ『ひよこの眼』という小説では、そんな普段は意識しない死や生が、主人公である「亜

紀」と転校生の「幹生」の物語を通して、その存在を訴えかけてきた。

この小説の始まりは、転校生として亜紀の学校にやってきた幹生の眼に、なにか懐かしい雰囲気を感じ取るという場面だ。この時の亜紀は理由も分からず、ただ幹生に懐かしい雰囲気を感じている。だが、物語終盤になって亜紀は気づく。懐かしさの原因は、露店で買ってすぐに死なせてしまったひよこの眼と幹生の眼が似ていたからだ。そのことに気がついた翌日に、幹生は亜紀の前から失踪した。死期が迫ったひよこと同じ眼をしていた幹生の運命は、転校当時から既に決まっていたのかもそれない。

ところで、この話にある「ひよこの眼」とは一体何なのだろうか。タイトルであり、本編にも絡んできた「ひよこの眼」という言葉は、確実に重要なものだ。にも関わらず、実際にそのことに触れている記述はほん

の数行しかない。物語全体の流れを見ると、ひよこの眼という表現は死とつながる意味合いを持つことが分かるが、何度か話を読んでいるうちに、ひよっとするとそれだけではないのでは、と思うようになった。

「死を見つめる眼」と作中ではひよこや幹生の眼のことがそう表現されている。言葉通りに受け取れば、存在も形も無い「死」という現象を意識していることになる。しかし、その解釈は本当に正しいのかと疑問に思った。想像してみたが、自分にはかなり無茶で突拍子もない話に思える。そもそも、これは自然な考え方ではあるが、心から納得することは出来ていない。なぜなら、この物語の中の亜紀がひよこの死にゆく様子を見届けた場面を読むと、ひよこは死そのものを見つめているというより、別のなにかを一心に見つめているように思えてならないからだ。では別のなにかとは何かという話になるが、今のところ答えは出ない。ただ、死を見つめる眼という文章について考えていて、

ふと気がついたことがある。

まだ社会人にもなっていないが、今まで生きてきた中で様々な人と出会ってきた。その中には、純粋に尊敬できる美点を持っている人も何人かいるのだが、そういう人達を見ていると必ず感じることもある。この人達は、自分とは見ている世界が違うのだろうなということだ。長所は人によって様々だが、その人達の誰もが共通して、自分とは確実に違う考え方やモノの見方というものを持っている。同じ世界を眺めているはずなのに、見える世界が違うと言えるほどにまでにだ。

少しずれた見解になるが、作中のひよこの眼とは、そういうものではないかと思った。何を見つめているかまでは分からない。けれど、死を意識しない私達とは異なる状況におかれた人達の、その眼はまさに、私達には見えないものを実際に見つめているのではないかと、そう思えるのだ。

『ころ』を読んで

2年 物質工学科 河野 日海子

『ころ』という作品は、“人間”について深く考えさせられるものでした。人間の感情とか汚いところとか、卑怯なところとか、人が生きること、人が死ぬこととか……。そういったことが多く描かれていたように思います。

「先生」の書いた長い遺書の中には、「先生」という人間のころの、悪い部分や弱い部分、先生自身も意識していなかったであろう恐ろしい部分がかかれていたと思いました。先生はお嬢さんに対する自分の思いを、Kに打ち明けることが出来ませんでした。そこで打ち明けることが出来れば、どんなに良い結果になり、どんなに違う未来になっていたのだろうと考えました。実際、私が先生の立場だったら言えないと思いますが…。それでも、Kが自分の思いを打ち明けた時には、後のためにも、先生も話すべきだったと思います。言わないで、Kの邪魔をしたのは卑怯です。先生も、その時の自分は自分が信じてきた自分とは違っていたと自覚していました。先生のお嬢さんに対する気持ちがあまりに大きかったため、自分も知らない自分が出てしまったのだと思います。しかし、こういうことは先生だけでなく、人間なら誰でもあるのかもしれない。そう考えると、怖いなと思いました。

先生のKに対しての行為の中で、「どうして?」と思う事はいくつかありましたが、その中でも、Kに何も伝えぬまま奥さんにお嬢さんをくれるよう頼んだことは、最低だと思いました。どんなにお嬢さんのことを好きでも、それは絶対してはいけないことだと思えます。先生に対して気持ちを打ち明けてくれたKを、完全に裏切る行為です。腹が立ちました。一つの感情で、こんなにも良心を失わせ、友人を裏切るようになるのかと思いました。

奥さんから先生とお嬢さんの結婚のことを聞いたKの気持ちがどんなものだったかは想像しきれませんが、悲しさや怒り、絶望など多くの感情が心の中にあっただのではないかと思います。そんな中で先生に対して普通に接していたKは、どんな風に考えていただろうと思いました。Kは「おれは策略で勝っても人間としては負けたのだ。」という感じが胸に渦巻いたと書いてありましたが、それを読んで、まさにその通りだと思いました。私がKの立場だったら、Kのような態度ではいられないだろうと思います。すぐに先生を問い詰めるだろうし、怒りの感情をぶつけます。友達からひどい裏切りを受けた訳だから、もう先生のことを友達とは思えなくなります。もしかすると、先生のしたこ

とを奥さんに話してしまうかもしれません。そう考えると、やっぱりKは強かったと思います。

Kが自殺してしまったと書いてあるのを読んだ時、私は自分の体が少し熱くなりました。人の命が終わるのは本当に突然で、その原因が何であっても、いつ死んでしまうかなんて分からないんだなと思いました。例えば、親とケンカして、仲直りしていないまま、交通事故で亡くなってしまったら……。この物語の先生のように、一生それを背負って生きていくことになるんだろうなと思いました。それはすごく悲しいです。先生はお嬢さんと結婚してずっと一緒に暮らしていま

したが、心から幸せな気持ちになることはなかったのではないかと思います。

人はいつ死んでしまうか分かりません。後悔することが無いように、先生のようにならないように、その時その時相手に真剣に向き合っていきたいと思いました。

この作品を読んで、人間のきれいではない部分を多く知り、考えることができました。これから先、人生ではいろいろな事が起こると思いますが、この作品から得たものを心の片隅に置いて、生活していきたいです。

有島武郎『小さき者へ』を読んで

2年 建築学科 梅木春菜

私はこの本を読んで、胸が苦しくもなり、心が温かくもなり、元気づけられもし、いろんな感情を感じさせられました。この本は、母を幼い頃に亡くした子供達に書いた父からのメッセージです。子供達が大きくなって一人前の大人になった時、読んで欲しいと、母の死の経緯、母の生前の愛情など、著者が我が子に伝えたかったことでした。同じ子供という立場である私にとっては、心にぐっと残るものがありました。

著者は、すごくストレートに自分の思いを伝えています。母を亡くしたというのは、きっとずっと消えることのない心の傷だと思います。当たり前のように母がいる周りの人たちとは違うのです。何か良い事を成しとげても、「よくがんばったね。」と言ってくれる母はいないのです。著者も、「自分の幸福は母が始めから一人で今も生きている事だ。」と書いています。でも著者は、そんな子供達にこんな言葉を残しました。「お前たちは生れると間もなく、生命に一番大事な養分を奪われてしまったのだ。お前たちの人生は既に暗いのだ。」「お前たちは不幸だ。回復の途なく不幸だ。不幸なものたちよ。」と。普通は我が子にこんな言葉は贈りません。子供達の心の傷を少しでも癒すために、忘れさせようとするために、「大丈夫だよ。」「母がいなくても元気でやるんだよ。」と言うかもしれません。でも著者は、すごくストレートに言っています。これは著者が子供達のことを思っているからこそなのでしょう。子供達の悲しみを、そんな確証のない言葉で慰めたくなかったのかもしれませんが。

しかし著者は、子供達を「不幸な者たち」とするだ

けでなく、前に一步進めるような、そんな言葉もたくさん書いています。「母の死を何物にも代えがたく悲しく口惜しいものに思う事は、恥ずべき事ではない。私たちはそのありがちの事柄の中からも人生の淋しさに深くぶつかって見ることが出来る。小さなことが小さなことではない。大きなことが大きなことではない。」という言葉で励ましています。妻の死という、世ではありきたりな事柄を、地獄に落ちたかのように辛く悲しい事とするのは、ある人達は馬鹿馬鹿しく思うかもしれませんが。しかし著者は、そういった世の中の人が無頓着、つまり小さなものとみなしているからといって、小さなものとして見てはいけない、と伝えたかったのかもしれないと考えました。そして同時に著者は、「自分の悲しみにばかり浸ってはいならない」とも書いています。私は、悲しくて泣きたくする時は、まるで世界で自分一人しかいないかのように、周りの事が一切見えなくなります。考えることができません。きっとそのせいで、たくさん迷惑をかけたと思います。著者は、そういう風にはなるな、と言っているのだと思います。自分より不幸な人はいっぱいいます。「お前たちと私とは、血を味わった獣のように、愛を味わった。行こう、而して出来るだけ私たちの周囲を淋しさから救うために働こう。」悲しむことは悪い事ではありません。でも、もっと周りに目を向け、自分たちが今まで受けてきた愛を周りにもかけることが大切なんだと感じました。著者が子供達へ伝えたかった事に、最後にこういう言葉があります。「小さき者よ。不幸な而して同時に幸福なお前たちの父と母との祝福を胸に

秘めて人の世の旅に登れ。前途は遠い。而して暗い。然し恐れてはならぬ。恐れない者の前に道は開ける。行け。勇んで。小さき者よ。」胸が熱くなるような言葉

です。親が子を思う気持ちが痛いほど分かるし、とても勇気が出る言葉です。この本を読んで、私が一番感動した部分でした。

夏目漱石の小説を読んで

3年 機械工学科 金丸 拓樹

私が初めて出会った夏目漱石の小説は『坊っちゃん』でした。小学生にも理解できる明快な構成と、全編にただようユーモア性で、多くの小説のようなじめじめとした影がなくさわやかで痛烈な作品でした。

主人公の坊ちゃんは無鉄砲でわんぱくな江戸っ子。やがて教師となった坊ちゃんが四国のある中学校に勤めることになり、ここがこの小説の主な舞台となります。

この学校には腹黒い教頭の赤シャツと取りまきの画学教師野だいこ、それに対する正義派の数学教師山あらしがおり、マドンナをめぐる事件が起こります。こうした中に坊ちゃんが正義派に加わり戦っていきます。

一般的に考えられる良い教師の型が坊ちゃんや山あらしであって、悪いのが赤シャツらだと思えます。しかし実際はこのような計算高い赤シャツや保身もっぱらのたぬき校長が教育者としては適任と見なされます。

夏目漱石のある手紙に「自分は教育者として適任と見なされるたぬきや赤シャツよりも不適任な山あらし、坊ちゃんを愛する。」ということを書いているそうです。私もそれにはとても共感できます。小説の中で坊ちゃんが辞職を申し出て「履歴より義理が大切です。」と言ったように、彼らの正義をつらぬくさっぱりした性格や行動、一本気に好意を持ちました。

最後に赤シャツと野だいこに天誅を加えることで、正義が勝利するという痛快さ楽しく読めたのを記憶しています。

夏目漱石の同じようなユーモラスな小説に『吾輩は猫である』があります。これはある教師の家に飼われることになった猫が人間社会を嘲笑的に観察する物語です。

『坊っちゃん』では坊ちゃんが自分をこの時代には新しい「僕」でも、「私」でもなくざっくばらんに「おれ」という一人称で通しています。これによって私はさらに坊ちゃんへの同情や共感をしやすくなりました。

『吾輩は猫である』でも、この頃大臣などがいばって用いたという「吾輩」を猫が一人称として用いることで全体的にユーモラスな表現になっています。

また、この小説で夏目漱石は、作品を構成している雑談、珍談、様々な小事件を通して世間を笑いながら痛烈に批判しています。

しかし、最近になって読み返してみると、『坊っちゃん』にも社会や人生について多くのものを秘めていると思うようになってきました。『坊っちゃん』にしても、『吾輩は猫である』にしても初めは楽しく読んでいたのですが、その後読むうちに夏目漱石が生きた明治という時代を強く感じ興味を持つようになったのです。

明治という時代、維新によって新しい国家が誕生し国民は皆高揚していました。「明治いい時代だった。」と多くの人が言い、あこがれるように、日清日露の戦争に勝利し、多くの偉人が活躍した時代でした。

しかし、富国強兵一本槍で育った国家、そして列強の仲間入りを喜ぶ人々にはおごりがあったかも知れません。『吾輩は猫である』で猫は「いくら人間だって、そういつまでも栄えることもあるまい。」と言っていますが、夏目漱石は人間のおごりやわがままをこの時代に見つけてそれを批判したのだと思います。

さらに、夏目漱石が批判した人々の意識は今日の日本人にも当てはまります。経済大国となり、大量生産大量消費の時代に人々のわがままや欲はますます膨らんでいます。

どこまでも利益だけを追求する現代社会を猫はどうあざ笑うでしょうか。また、赤シャツのような人物のはびこる政界などに坊ちゃんはどうか立ち向かうのでしょうか。

猫の視点で書くことで夏目漱石はその虚偽に満ちていることや滑稽さを伝えようとしたのだと思います。単純明快な坊ちゃんでしたが、その正義に妥協しない姿は理想ではないでしょうか。

これらの小説に反映されている、夏目漱石の道理を求め心にこれからも学ぶことは多いと思います。

『檸檬』を読んで

3年 電気情報工学科 押川侑樹

おもしろい。この本を読み終えたとき、思わず叫んでしまった。それほどまでに、この『檸檬』という小説は、他の文学小説とは一風変わっていると思った。

えたいの知れない不安に終始苛まれ、それまで好きだった美しい音楽も詩の一節もイヤになってしまう「私」。以前の私は「丸善」という店が好きで、赤や黄のオードロンや小刀、煙草などを小一時間も見たりしていたが、今ではそこからも足が遠のき、毎日街をふらふらとさまよい出ている。

この小説のあらすじの主に出だしの部分であるが、とても共感できる場所があって興味深かった。特に、毎日、不安に苛まれて今まで好きだったものにも興味が持てなくなるところなどは。無気力になるというか、本当に毎日が憂鬱で仕方ないのである。何か新しいことにチャレンジしても、その不安のせいで心から楽しめない。本当に、どうしようもなく焦ってしまう。たぶん、主人公である「私」も、そんな気持ちだったのではないのだろうか。また、この不安だとか壊れかかった街だとか半ば廃墟となった家並みなどは、「死」やそれに限りなく近いマイナスのイメージを与えている。このことから、私の心の動きが読み取れる。

そんなある朝、私はいつもの様に街をさまよっていた。その時、一軒の果物屋でその店には珍しい檸檬が出ていたのに目をとめる。私は檸檬の単純な色も、紡錘形の形も好きだった。檸檬を一つ買うと、あんなに執拗かった憂鬱が紛らされ、非常に幸福な気持ちになる。またしばらく歩き続け、何処をどう歩いたのか知らないが、気づくと丸善の前に立っていた。今まであんなに避けていたのだが、その時の私は易やすと入れ

るように思え、「今日は一つ入って見てやろう。」と思いついて行く。しかし、香水の壇も煙管も私の心をひくことはなく、次第に憂鬱になってしまう。その時、たもとに入っていた檸檬を思い出し、いろいろな色の本を手当たり次第に積み上げて、そのごちゃごちゃした色彩の城壁の頂上に檸檬をのせてみるといういたずらを思いつき、やってみた。私はしばらくそれを眺め、そのままにして、なにくわぬ顔をして外へ出た。店の外へ出てから、檸檬が黄金色に輝く恐ろしい爆弾で、十分後に丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなにおもしろいだろうと想像した。

檸檬などの感覚によって幸福をもたらすものは、あの不安などがマイナスのイメージを与えるように、それに対置する形で、「生」やそれに近いプラスのイメージを与えていると受けとれる。私が檸檬を握って「つまりはこの重さなんだな」と考えてみたりする場面があるが、この「重さ」とはつまり生命の重さのことを示しているのではないかと思った。元々、肺を患っており借金をしていて毎日を不安に過ごす私は、どちらかといえば「死」に近かった。そんな灰色な日々、風景の中で私は、檸檬という色鮮やかに輝く光を見つけたに違いない。

梶井基次郎は最初、エンジニアを目指していたが次第に文学に惹かれていった。彼が書いてきた小説は、自分の病気を題材にしたものが多かったという。今回読んだ『檸檬』もその作品の一つだ。肺結核を患っていた彼は、主人公の「私」と自分自身を重ねて見ている。彼もまた小説を通して、日々を鮮やかに色取ってくれる、そんな「檸檬」を探していたのだろう。

「さいはひ」を求めて

3年 物質工学科 田中勇希

「本当のさいはひは何だろう。」

この銀河鉄道夜のテーマでもあるこの言葉が今でも僕の心に残っています。この場合の「さいはひ」とは「幸せ」という意味であり、主人公のジョバンニとカムパネルラはこの幸せを探して、銀河へ旅に出るわけです。

途中に列車に乗ってくる客たちと話をするたび、少しずつ「幸せ」が何なのかということに近づいていくのです。

主人公のジョバンニとカムパネルラには、それぞれ家族に悩みを抱えています。その悩みがこの銀河鉄道に二人が偶然にも乗れた理由だと思えます。物語の中

には、普通の利用客、商人等も乗車してきますが、やはり中には家族に事情を持った子ども達が乗ってくる場面がありました。

商業のため、親や兄や姉に会うために乗車する人がほとんどのこの銀河鉄道ですが、終点は天上ということになっていました。天上とは、空の上の世界のことで俗に言う天国のことではないかと思えます。

終点まで行く客がいるかは分かりませんが、天国に行くということは死ぬということですから本当にそこで「さいはひ」を見つけることができるのかと疑問に思ってしまう。

人それぞれ「さいはひ」は違うのですから、同じ場所にそれがあるとは考えづらいのです。

僕は、その天上に行くまでにきっとそれぞれの「さいはひ」は見つけなければならぬのではないかと思えます。それまでに「さいはひ」が見つからなければ、そのことに悩むよりもいっそ死んだ方が楽だという意味で終点が天上なのではないかと思えます。

そういう思いが原作者の宮沢賢治に少しでもあったのではないかと思えます。

主人公のジョバンニとカムパネルラも「さいはひ」を探しますが、カムパネルラだけが自分にとっての「さいはひ」を見つめます。それは死んだ母に会うことで

あり、そのためにカムパネルラは銀河鉄道から突然消え、その後死んでしまいます。僕は、カムパネルラは最初からそのつもりで列車に乗ったのではないかと思えます。死ぬ覚悟とまではいかななくても、死ななければ会うことはできないと薄々気付いていたはずで、それでも会いたいという思いがカムパネルラにはあったのだと思えます。

ジョバンニの「さいはひ」は最後まで分からないままでした。しかし、ジョバンニは自分では「さいはひ」を見つけていないのに列車から降りてしまったのです。僕は、考えが間違っていたのかと読みながら思いました。しかし、その後ジョバンニの父親が帰ってくるという知らせが届いたのです。

ジョバンニは「さいはひ」が分からないのではなく、「さいはひ」に気付いていなかったのではないかと思えます。家族全員がそろろうということが「さいはひ」だったのだと思えます。ジョバンニがこの「さいはひ」に気付けたのは銀河鉄道に乗車したからなのです。

「さいはひ」と一言と言っても、それを見つけれない人もいれば気付かない人もいます。

銀河鉄道の旅は長いのです。天上につくまでの多くの時間を使って、ゆっくりと「さいはひ」を見つめることができればいいのではないのでしょうか。

『こころ』を読んで

3年 建築学科 吉村 茉奈

私は本を読むことがとても好きです。これまでに『こころ』も三回読みました。一番最初は中学一年生。次に中学三年生、そして高校三年生の春です。高校になって読んだ時、私がこれまでの中で一番といっても過言ではないほど本に対して感動と衝撃を受けた瞬間でした。

この『こころ』の著者である夏目漱石は、知らない人はいないだろうというくらい日本を代表する小説家の一人です。夏目漱石の代表作としては、『吾輩は猫である』『坊っちゃん』『三四郎』『それから』『門』『夢十夜』などが挙げられます。その中でも有名な「こころ」の主な登場人物は、私、先生、先生の奥さん(お嬢さん)、K(先生の親友)です。私がこの本を読んで注意深く読むべきだと感じるの、Kと先生の死因についてです。まずKの自殺した理由は、純粹に読む限りでは先生に裏切られそれに絶望したからだと考えられます。しか

し何度も読んでいくにつれて、様々な違う見方もできることに気付きました。それは近代人でありながら、近代的な人間関係を築くことができないことによる孤独。「家」とも絶縁してまで追い求めたKの理想と、お嬢さんに対する恋という現実との衝突からくるKの挫折。おいうちをかけるかのように、唯一の友人がしたKへの裏切り行為。Kの孤独やさみしさ、絶望感はその、このような状況をつくってしまった原因は自分にあると自分自身を追い込んでいったのかもしれない。そして生きることへのむなしさを感じ、ある時ふと自殺を思ったのではないのでしょうか。

次に先生の死因については「明治の精神」が大きく関わっていると感ずります。先生が自殺を決心した引き金は、おそらく乃木大将の殉死にあると思ひ、乃木大将について調べてみました。

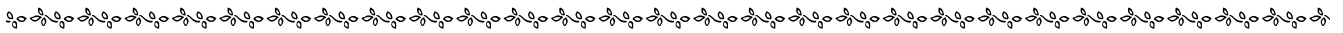
乃木大将は西南戦争で軍旗を敵にとられ、それ以来

三十五年もの間罪悪感にかられ苦悩していたとありました。先生もまたKが自殺して以来、罪悪感を感じながら、自分の中の暗黒の出口を見出すことができずに日々を送ってきていたのです。乃木大将の生き方とよく似ています。漱石は乃木大将の武士道精神に大きな影響をうけたのだらうと感じました。乃木大将も、先生も、死を選ぶことによって苦しい人生を終えることができたのです。

『こころ』をはじめとして、「日本文学」は一言でくくれるものではありません。上代文学(万葉集)、中古文学(源氏物語)、中世文学(平家物語)、近世文学(浄瑠璃)、近現代文学(明治維新後)、これら時代ごとの作品を読むことで、時代ごとの文化、思想、衣食住など作品から様々なことが分かります。理解することは容

易ではありませんが、それを理解できたとき、作品に込められている何かを見つけられたとき、その瞬間こそ本の魅力の一つであると思っています。

私はこの『こころ』という本に出会えてよかったと思っています。これによって私は本の魅力を知ることができました。本は読めば読むほど新しい発見があり、喜びと感動、知識を与えてくれます。少なくとも本を読むまでの私は無知でしたが、本を読むことにより漢字や表現の仕方など、少しずつ確実にボキャブラリーも増えてきています。私はこれからどんな本に出会うのか、とても楽しみです。そしてこれから『こころ』以上に引き込まれる本に出会うかもしれません。けれど『こころ』が私の生涯の愛読書になることは間違いありません。



わたしを束ねないで

新川和江

わたしを束ねないで

あらせいとうの花のように

白い葱のように

束ねないでください わたしは稲穂

秋 大地が胸を焦がす

見渡すかぎりの金色の稲穂

わたしを止めないで

標本箱の昆虫のように

高原からきた絵葉書のように

止めないでください わたしは羽撃き

こやみなく空のひろさをかいさぐっている

目には見えないつばさの音

わたしを注がないで

日常性に薄められた牛乳のように

ぬるい酒のように

注がないでください わたしは海

夜 とほうもなく満ちてくる

苦い潮 ふちのない水

わたしを名付けないで

娘という名 妻という名

重々しい母という名でしつらえた座に

坐りきりにさせないでください

わたしは風

りんごの木と

泉のありかを知っている風

わたしを区切らないで

コンマ、ピリオド、
、や・いくつかの段落

そしておしまい「さようなら」が

あつたりする手紙のようには

こまめにけりをつけないでください

わたしは終わりのない文章

川と同じに

はてしなく流れていく 拡がっていく

一行の詩

「JDream II 研修会開催」

図書館では去る平成23年11月25日(金)、JST(独立行政法人科学技術振興機構)イノベーション推進本部情報提供部福岡デスクから、インフォアドバイザー・のぎ田めぐみ氏を講師としてお招きして、「JDream II 研修会」を開催した。

対象は本科4～5年生、専攻科1～2年生及び教職員。なお、当日は合わせて36名の参加があった。

研修会は次の4つの項目に分けて、進められた。

- 1) JSTについて
- 2) 科学技術文献情報とは？
- 3) 文献の入手方法
- 4) 検索のコツ



1) JSTについて

主な事業内容として①「イノベーションを生み出す研究開発システム」、②「イノベーションを生み出すための研究基盤整備」があり、②の事業のひとつとして「科学技術情報の流通促進」があることが説明された。

2) 科学技術文献情報とは？

現在は「情報」という言葉が様々なニュアンスをもって用いられていることから、のぎ田氏はこの言葉の定義から話を始められた。科学技術情報とは、研究開発活動(実験、観測、観察など)の成果として出される情報のことであり、科学技術情報(成果)を文字によって表したものが文献情報である。科学技術文献情報はどこで見ることができるのか、なぜ科学技術文献情報を調べる必要があるのか、また科学技術文献情報の役割について説明が行われた。

3) 文献の入手方法

科学技術文献情報をどこで手に入れるのか、そのためには専門のデータベースを活用するのが効率的である。JSTのデータベースJDream IIは、パソコン上で簡単に素早く閲覧できる科学技術文献の巨大な図書館機能を持っており、科学技術の全分野を網羅的に収集している。そのため的高手く活用するための注意点、検索の仕方の説明が行われた。

4) 検索のコツ

知っておいたほうが得である検索のコツ、注意点について資料に基づき説明が行われた。

のぎ田氏の報告によれば、JDream IIは上場企業の約7割が利用しているとのこと。加えて、約5,600万件の文献情報を収録する日本最大の科学技術文献データベースであることから、これを有効に活用することは教育・研究に大きく役立つであろうと考えられる。研修会終了後のアンケート結果では、検索方法について正しく理解することができ、大変有意義であったという声が聞かれた。

図書館では今後もこのような研修を計画的に行っていきたいと考えている。(文責・野上)



今年度の活動と図書委員会の在り方について

学生図書委員長 機械工学科 浅野 大樹

副委員長 物質工学科 寺田 拓真

図書委員の仕事で一番大きな仕事は？と聞かれると、私たちはすかさず「ブックハンティング」と答えます。「ブックハンティング」とは、学生自身が直接本屋に行き、本を選び購入することです。クラスで事前にアンケートを取ることで、学生が一番望んでいる本を学生自身の目で選び、手に取り、購入することができるのです。

この行事ですが、去年までは1年生から3年生までの低学年の図書委員しか参加できず、4・5年生は直接購入に行くことは出来ませんでした。しかし、今年度は、高学年の「専門書を自分たちの目で見て購入したい」という強い思いが実現して、低学年の図書委員だけでなく、全学年の図書委員がブックハンティングに参加できるようになりました。

高学年の人たちが参加することで、より高度で、授業や実験に最も必要な情報の載っている専門書を図書館に入れることが出来ました。

高学年生の「ブックハンティング」の参加は、文化祭の研究発表や卒業研究などにより厳しいものがありますが、今後も実施していきたいと考えています。

さて、このような活動をしている私達ですが、他には何をしているのかといいますと、目立った活動は行っていないのが現状です。図書館の利用者を増やすために、「ブックハンティング」で入れた本の紹介や、図書委員会のオススメの本の紹介などを行って来ましたが、思うような成果が挙げられていないのが現状です。

これから図書委員会全体としては、より多くの学生・地域の皆様に図書館を利用していただくことを目標に活動していきたいと思っています。

「ブックハンティング実施される」

昨年度までブックハンティングは低学年の図書委員を対象に実施していましたが、高学年も実施してほしいという要望に応え、今年度のブックハンティングは高学年(3、4、5年生)と低学年(1、2年生)の2回に分け実施しました。

まず11月23日(水)に高学年の図書委員11名が参加して、宮崎市の蔦屋書店で実施しました。蔦屋書店は宮崎市の中でも大型の書店で、専門書も多く取りそろえている書店です。

続いて12月14日(水)に低学年の図書委員8名が参加して、都城市内の田中書店川東店で実施しました。各クラスの図書委員は1時間という短い時間ではありましたが、購入希望リストに沿って熱心に選書を行いました。

選書した図書は全部で105冊です。閲覧室に専門のコーナーを設け、貸出を行っていますので、是非図書館へ足を運んでみてください。

4月には図書委員の手作りによるブックレビューができる予定です。



〈ブックハンティング〉で購入した主な本 (2011年度)

(105冊購入した本の一部です。)

書名	著者名
UNIXの絵本	アंक
図解三国志(F-files ; no.031)	藤井勝彦
風刺画で読む十八世紀イギリス	小林章夫, 齊藤貴子
「通貨」を知れば世界が読める(PHPビジネス新書 ;179)	浜矩子
哲学的な何か、あと数学とか	飲茶
有機合成の落とし穴	Florencio Zaragoza D·rwald
有機反応機構の書き方	Robert B.Grossman
弾性力学入門	竹園茂男 [ほか]
妹島和世西沢立衛(GA architect)	妹島和世, 西沢立衛
覆る建築の常識(東日本大震災の教訓 ; 都市・建築編)	日経アーキテクチュア編
最高の建築をつくるデザインのルール300(エクスナレッジムック)	彦根アンドレア
九州の原発	橋爪健郎編
フェイスブック若き天才の野望	デビッド・カークパトリック
ユニクロ思考術	柳井正監修
9割がバイトでも最高のスタッフに育つディズニーの教え方	福島文二郎
村上春樹のなかの中国(朝日選書 ; 826)	藤井省三
謎解きはディナーのあとで 2	東川篤哉
名のないシシャ	山田悠介
トンネル 上	ロデリック・ゴードンブライアン・ウィリアムズ
トンネル 下	ロデリック・ゴードンブライアン・ウィリアムズ

図書館からのお知らせ

統合図書館システムへの移行について

図書館では、平成24年2月に現在使用している図書館システム「LINUS/NC」から、「統合図書館システム」へ移行しました。

「統合図書館システム」は、長岡技術科学大学においてシステムサーバを統合、一括管理し、クライアントのみを各高専に設置するものであります。

「統合図書館システム」への移行によって、導入経費等の節減、システム対応業務時間の削減、他システムとの連携による業務効率の向上、更には全国高専図書館間のより一層の連携を図ることが期待されています。

図書館開館予定

今年度の夜間開館及び土曜日の開館は、3月1日(木)までです。

次の期間は、平日のみ開館します。

期 間 3月5日(月)から3月30日(金)

開館時間 9時から17時まで

平成24年度の夜間開館及び土曜日開館は、4月4日(水)開始予定です。

学年末・春季休業中の長期貸出について

通常10日間の貸出期間を学年末、春季休業中は長期貸出とします。

貸出開始日 2月21日(火)

返却日 4月4日(水)

帯出冊数 7冊

編／集／後／記

今号には、今年度の校内読書感想文の入賞作品を特集として掲載しています。入賞作品は、1年から3年の全学生の作品から選ばれた力作揃いで、昨年12月の全校集会で表彰されたものです。ご多忙の中、学生の読書感想文をご指導くださいました国語科の先生方に厚くお礼申し上げます。